

子どもの中に何を見つけ、どう理解し保育に役立てたらよいか 障害をもつ子どもの問題

藤田 博子

企画・司会者 下山田裕彦（静岡大学）

話題提供者 津守 房江

（愛育養護学校家庭指導グループ）

那須 浩二（静岡大学附属養護学校）

川合 忠美（静岡いこいの家）

藤田 博子（浪速短期大学）

指定討論者 榎沢 良彦（富山大学）

問題提起

附属養護学校の子どもたちと接する日々の中で、私（企画者）はこれまでの発想の転換を強いられるような

衝撃を受けている。なぜこの世に障害を負う子どもが存在するのであるのか、「なぜなのでしょう」との問いが私から発せられない日はない。いい知れぬ悲しみと憤りが私の心の奥深く積もっている。にもかかわらず、私はずどもたちの中に、その子特有の善さを見出すことがある。その善さの発見こそ、保育の最初にして最大の課題なのではないだろうか。「この子らを世の光に」と唱道したのは故糸賀一雄（近江学園・びわこ学園創立者）である。障害を負う子どもたちは本当に「世の光」なのであるか。とするならば、私たちは子どもたちが投げかけてくる重い問いを謙虚に受け止め、子どもたちに寄り

添いながら、障害を負う子どもたちの保育の内実をもう一度、再検討する責任があるだろう。志を同じくする学会の皆さん方と、心を開いて討論してみたい。

一九九四年五月十五日、日本保育学会第四十七回大会において、下山田裕彦会員（静岡大学）の企画によって行われた自主シンポジウムは、多数の会員の参加を得、会場からも積極的に報告、意見、助言がなされ、この深い問題を真摯に共有しつつ進められた。

まず、企画者で司会者の下山田裕彦会員によって先に掲げた問題提起がなされた。その後、藤田博子、川合忠美、那須浩二、津守房江会員の話題提供に続いて会場からの意見ならびに助言がなされ、最後に榎沢良彦会員の討論で締め括られた。その要約はおおよそ次のようであった。

藤田博子会員の提言

今日の社会の中には、平等であるはずの人間を差別す

る思想が根強く巢喰っています。それは、人種差別・民族差別、貧富による差別、能力差別などです。そのうちでも能力差別こそは、障害をもった子どもたちにとつて、過酷な差別であるといえましょう。そのうえに、この能力差別においては、健常児と障害をともなった子どもとの違いを、単なる量的なものではなく、質的な違いだとみなす考え方が、今日支配的なのです。そのために、教育や発達の可能性すら顧みられずに打ち捨てられ、疎外されている子どもたちがいるのです。パール・バック女史は“The Child who never grew”の中で、「どんなに重い障害を持った子どもも人間としての本質はあるのです」と叫び、障害とは質的な差異ではなく量的な差異であることを訴えつつ、知能の計量化と、それへの盲信を諷めています。

私たちが、人間としての「質^{クオリティ}」を尊重し、人格面に重点をおいた人間形成を志向する場合、さしあたって着手すべきことは、今日の教育の場において重視されている「知能の計量化」に立ち向かうことでありましょ

う。「I. Q」というものは、確かに「知性」の一部としては認められますが、計量的に測定され得るものだけが、決して「知性」ではないのです。人間としての「質」と、「I. Q」の測定値とは決して同じではないことを、私たちは心しなければなりません。

私たちは、保育者として、すべての子どもが、真に人間らしく生きるために敗えて為さなければならぬことは、「能力の計量化」より、「人間としての質」を重視するという、価値の一大転換を図ることなのです。オランダの教育学者、ランゲフェルトは『教育と人間の省察』の中で、「あらゆる個人における人格的固有性に最優先の価値を認めることこそ、教育の本質的前提である。」と語っています。ランゲフェルトの説くように、子どもたちがそれぞれに、「自己自身になる」、「個的人格になる」ということが、教育の基本であるとしますと、障害をもった子どもたちは、その子どもなりに、独自の人格的固有性を高め、絶えず新たな自己創造に努めるように援助されなければならないのです。この場合、自己創造

ないし人間形成の媒体は、洗練された文化や高度な学問ばかりではありません。たとえ、それが、どんなに単純な活動であっても、それが当の本人の全人格を投入して営まれる労作である限り、それは、立派な人間形成の媒体なのです。子どもたちが、その活動にどれだけ全身全霊を打ち込み、自己創造に努めたかということが大切なのです。要するに、どんなに重い障害をもった子どもであっても、一人ひとりの子どもたちの一生がそのまま、「人間の尊厳とは、人間の輝かしさとは何なのか？」という問いに対する各自の答となるような人生を歩むべく、その発達が援助されなければならないのです。この保育の原点は、そのまま、どのような子どもを対象にした保育においても同じであるといえましょう。

川合忠美会員の提言

私は心身障害幼児の通園施設に、保育者ならびに療育相談担当者として勤務しています。そのいずれの担当においても、まず何よりも眼の前の子どもを引き受けなけ

ればなりません。しかし、双方の立場においては微妙な差異と矛盾があるのです。たとえば、保育者である時は、子どものしめす様々な行動に対して「Yes, OK」を出しつづけていきます。一方、相談者としてのそれは、今、何が基本的で、何が基本を要する問題かを考えていくのです。いわゆる、保育の場では、一人ひとりの子どもたちが負っている障害というものを、過大に感じないように出来るだけ封じ込める努力をし、密度の濃いコミュニケーションを子どもたちとのかかわりのなかで創りたいと願い、相談の場では、一人ひとりの子どもたちの背負っている深刻な問題に、もう一刻も早く、何らかの方策を考えていかななくては子どもも家庭も持ち堪えられないと、問題をことさらに顕在化させる方向でアピールするのです。なぜなら、そうしないと、治療・訓練・保育の場が確保できないという矛盾があるのです。このように私たちは子どもの障害ということをめぐる揺れ、その問題の重さを恣意的に解決しているのです。それはそのまま、その対応をめぐる様々な幅を産んで

います。

ことに、私のかかわっているのは、ほとんどがことを未だ獲得していない乳幼児期の子どもたちですので、いかにその生活と遊びの中で、ノンバーバル・コミュニケーションを育てて行くかがテーマになるのです。「焦らず、倦まず、弛まず」子どもと共に在ることは難しいことです。障害児保育はなおさらです。なぜ、私は保育者として、子どもの前に居るのか、自分の生き方と、どうつながっているのか、あまりにも身近過ぎて、普段は雑事に追われあまり考えないことです。こうした機会に会員の皆さんの意見を聞かせていただいて新鮮な気持ちで明日の保育に繋げていきたいと願っています。

那須浩二会員の提言

私は静岡大学教育学部附属養護学校に勤務して、小学部一、二年生を担当しています。障害と一口にいっても、その障害を受けている部位や症状により様々です。それゆえ、障害をもつ子どもの問題を、子どもをとりま

く社会の問題としてとらえた方が、問題はより広く深くなると思うのです。そこで、私は見方によっては狭い見解ともいえるかも知れませんが、現在の私の教育活動の直接的な対象であり、私の人生の師ともいえる一組のちびっ子たちに焦点をあて、より具体的な例をもって、子どもたちの問題と子どもをとりまく社会の問題の二点について話したいと思います。

ひとつに、子どもたちの問題といえば、子どもたちに問題がありそうな言い方ではありますが、実は子どもたちには何等問題がなく、子どもたちに接するときの私たちの問題なのです。私たちのクラスでは、朝一番に音楽に合わせて体を動かします。歩く、走る、しゃがむ、立つ……。子どもたちは喜んで乗ってきます。フォーク・ダンスも本当に楽しそうに体を動かすのです。私は、これまで、フォーク・ダンスや音楽に合わせた身体活動、表現活動がこれほど楽しいものだとは思ってもみませんでした。それなのに彼らと踊っていると実に楽しいのです。私は人生の楽しさの一つを彼らから教わったと思

ます。ところが、外部の参観者は、そんな私たちを見て「大変な仕事ですね」と言って帰られます。人をあわれみや同情の念で見ることがやさしいことです。しかし、そこから一步踏み込み、子どもたちが本当に今何を感ず、何を喜び、何がしたいのか。そこを少しでも知り得たとき、お互いに人間として対等になれたといえるのではないのでしょうか。

ふたつには、子どもをとりまく社会の問題です。子どもたちが登下校に接する人たちはさりげなく援助の手を差し伸べてくれますし、障害をもった子どもたちに対して温かい心をもってくれています。しかし、障害をもった子どもに直接触れる経験が少ないために、理解する経験が少ないのではないかと思うのです。憂うべきは差別ではなくて、無知ではないでしょうか。社会の人たちが心に余裕を持ち、一対一で真正面から向き合ってみれば、理解できることが多いのではないのでしょうか。また、「社会生活への適応と自立」が私の学校の教育目標ですが、真の適応・自立とは、社会的課題に自ら働きか

け、問題を解決する中で、自己の人間としての要求を最大限に満たすという、積極的なものではなくてはなりません。それは、自分の人生を自分で切り拓いていく原動力を育てることなのです。その援助こそが私たちの仕事であるのです。

津守房江会員の提言

私たちは長い間、知能におくれのある子や、体の機能に問題のある子、情緒の不安定な子どもたちを障害児と呼んできました。しかし、この呼び方では、その子の負っている障害（ハンディキャップ）にはかり目がいって、一人ひとりの子ども心の世界に目がいかなくなってしまうのです。

この子どもたちと親しくつき合くと、子どもらしい愛らしさや、輝きや、悲しみや、そのような存在を無視して、一様に障害児と呼ぶことに抵抗を感じて、私は「成長のために、特別の手助けを必要とする子ども」と言い表しています。子どもはどの子どもも一人ひとり違う

し、どの子ども成長のために、大人の手助けを必要とします。「成長のために、特別の手助けを必要とする子ども」は、私たち大人に、全ての子どもを代表して、心の叫びを訴えているように思うのです。この子たちの叫びにこたえて生きやすく手助けすることは、全ての子どもが生きやすくなることにもつながることなのです。

ところで、この子どもたちの訴えの第一は、こんな自分でも受け入れてくれるのだろうか、ということですが、自分は不安に満ち、他の人が何でもない出来事でも、堪え難かったり、言葉も話せなかつたりします。もっとしっかりした子どもになれないのだが、それでも受け入れて欲しい、存在を認めて欲しいと願っているのです。どんな子どもでも恐怖を感じると親しい大人にしがみつきます。不安の大きい子どもはことさらにしがみつき泣きわめきます。こんな場合、その子どもへの無理解が、「困った子ども」になり、「いやな子ども」というふうになり、理解できないことと、拒否的な気持ちとが結びつくと、偏見になるのだらうと思うのです。子どものありの

まを認めることは、大人もまた、自分のありのままを認めて生きていくことになるのです。自分のありのままを認めるということに関しては、かえって、健康といわれる子どもが、自由に自分らしく振る舞うことに戸惑いを感じているようです。それゆえ、幼児期には枠をはずして、ありのままに生き、その中から自分らしさを見出していくような支援は、どのような子どもにも必要だと思ふのです。私たちは自分の中にある偏見に気づき、それを克服しようと精神力を発揮しますが、次の世代でもっと自由に、共に生きることが出来ることを願っています。

文化とは、「生命をはぐくむこと」と学びましたが、最も育ちにくい生命をはぐくむことこそ、真に文化的なことだと思ふのです。

指定討論者 榎沢良彦会員

今日までの障害児保育（教育）がかかえている問題は、教育そのものについての私たちの考えに発している

ように思います。それは、能力を重視する教育観です。

私たちはよく「子ども一人ひとりの能力に即した教育」「子ども一人ひとりの能力を伸ばす教育」ということを言いますが、この言葉の根底には、「何かをする」とができ、社会に役立つ人間こそ価値がある」という人間観が横たわっているように思います。そのような人間観に立つと、何かができるという意味での能力を伸ばすこと（有能な人間を作ること）が教育の最優先課題とされます。そして、到達目標が設定され、その目標にいかん効率よく子どもたちを到達させるかが問題とされるのです。この時、教師は子どもを対象とし、ひたすら働きかけ、教師としての責務を果たそうとします。障害児に対しては、言語理解能力が低いからということで、訓練という形で変えていこうとします。

このような教育においては、子どもと教師の関係は一方的な主従関係のようなもので、教師は常に正しく、子どもは正しい教師に従うべきとされます。そのために、子ども自身が自ら育とうとする方向や仕方、教師の基準

に合わない限り否定されず。ときには、人間としての尊厳さえ踏みにじられることにもなるのです。障害児保育においても、大人が子どもを変えよう（障害をなおそう）とする限り同じことが起きます。子どもはそのような大人に抵抗し、大人は思い通りにならない子どもにも立腹し、共に不幸な生活をするようになるのです。

このような不幸な状況を克服する道は、私たち大人が、子どもとの一方的関係から脱け出て、相互的關係の内に生きようとするところにあるのではないでしょうか。それは、子どもの「障害」に焦点を当てることを止め、子どもと私の「クオリティ・オブ・ライフ」に注意を向け、共に生きやすい生活を築こうとすることです。私たちが、そのように生きはじめたとき、私たちはいつの間にか自分が子どもによって変えられていることに気づきます。すなわち、子どもと大人、障害者と健常者が真に対等な存在であることに気づくのです。そして、障害児への尊敬のまなざしが生じます。そのまなざしの許でこそ、子どもは自分の意志で、自分固有の仕方て成長

して行くのです。

こうした、相互的な関係に生きる子どもと大人は共に成長していくことになるのです。私たちが、子どもと大人の根源的な対等性に気づき、その関係の内に生きようとするところから、教育の本質である「共生」がはじまるのです。それは障害をともなった子どもたちの保育においても同じことがいえるのです。

以上の話題提供、指定討論に対してフロアから、統合保育の実践の中での子の喜びの報告、「子どもを主人公に」との提言、「障害とははたして個性か」といった問い掛けなどがなされ、問題意識を共にする多数の会員たちが、真摯に話題を共有し、心にしみいるような時間を分かち合った。

*この原稿は、日本保育学会第47回大会、自主シンポジウム（同タイトル）を藤田博士が要約、構成してまとめたものです。
（浪速短期大学）